6

傷寒論条文で見られる「反」字の語法研究

莊　明仁
台湾 瑞聯中医クリニック

傷寒論は東漢時期に書かれたもので，簡単な文章だが其の意味は深く，語意は難明である．条文中の主証の叙述以外に，接続詞や副詞なども其の語意一つで意味が異なってくるほど重要な役割を担っている．本稿では，「反」という一字が条文中でどのような役割を担っているのか，「反」の語法研究を行う．藤堂明保の『新漢和大字典』によると，反，会意．布また薄い板を手で押して，そらせた姿．そったものはもとににかえり，また，薄い布や板はひらひらとひるがえるところから，かえる．ひるがえるの意となる．と動詞として作用するもの，「1．かえる．もとへ戻る．2．かえる．裏がえし，または，逆になる．3．ひるがえる．4．かえりみる．5．むほんをおこす．6．そむく.」など，副詞として作用するもの，「7．かえって．反対に．逆に.」など名詞として作用するものがある．まず，「かえって，反対に，逆に」のように副詞として作用するものには，「病人身大熱，反欲近得衣者，熱在皮膚，寒在骨髓也.」「面色反有熱色者，未欲解也，以其不能得小汗出，身必癢，宜桂枝麻黄各半湯.」「傷寒有熱，少腹滿，應小便不利，今反利者，為有血也，當下之.」「少陰病，下利，脈微濇，嘔而汗出，必數更衣，反少者，當温其上，灸之.」これらの条文中では，「反」字が患者の症状表現と予期の出入り口となり，観察し残しが無いようにしなければならない．故に辨証の理解と分析を進めることで，更に正確な治療をすることができる．また，「太陽病，初服桂枝湯，反煩不解者，先刺風池，風府.」は治療は常規に従って行うが，想定外の状況にどのように処理を加えるかという方法が示されている．次に「太陽病，桂枝證，醫反下之，利遂不止.」「腹中應冷，當不能食，今反能食，此名除中，必死.」これらの条文は即ち，叙述前医師の誤った治療の状況下で現れる病状の変化を示す．それは壊死或いは死症を招くもので，「反」字は警示を強く表している．または，「凡得病，反能飲水，此為欲愈之病.」のように予後の良好的情形を示したものもある．次の条文は，動詞の「かえりみる」の意味を持つ．「傷寒發熱四日，厥反三日，復熱四日.」反は返，復と解釈する．そして，「若劇者，必反覆顛倒.」「背反張者.」などの条文は即ち動詞の「ひるがえる」であり，翻覆，翻転を示す．さらに，「又脈來動而中止，更來小數，中有還者反動，名曰結，陰也.」における「反」の字は，かえる意であり，もとへ戻るなどの使い方をする．また，『平脈法』では，「少陰脈不至，腎氣微，少精血，奔氣促迫，上入胸膈，宗氣反聚，血結心下.」と宗気の反聚，「反」は返解と見なす．そして，『平脈法』:「假令脈來微去大，故名反，病在裏也.」の「反」字は名詞であり，脈来ること微に去ること大なるの脈象を示す．このように，傷寒論条文中の「反」の多くは「反而」と解し，「返回」とする解釈もある．前者は相反まで進行した状態であり，後者は元に戻った状態である．白川靜は，こうした相反義を「反訓」と呼んでいる．『漢字の世界2』によると，「そのように相反義を含むものは反訓とよばれるが，これを以て中国の古代の訓詁のうちに弁証法的思惟を含むとする論者もある．しかしいわゆる反訓とは，概ねこのような訓詁上，字形学上の誤りから生じており，厳密に相反義をもつ反訓の字はない．古代文字の世界は，そのような詭弁的思惟をむしろ拒否する，直切にして具体的な世界である.」と，反訓は後世の誤認から生じたものだと述べられている．傷寒論条文で用いられている字は質樸であり，後世の医家たちの注解が意味をわかりにくくしており，白川静の言う詭弁的思惟に陥っているのではないだろうか．反字の条文の多くは，病情転折のポイントにあるため，文中に隠された深い意味を丁寧に読み取っていかなければならない．